

M. F2020年降誕節第七主日礼拝
「小さな群れよ！」ルカ福音書 12:23～34

【聖書テキスト】

ルカ福音書 12:22 それから、イエスは弟子たちに言われた。「だから、言っておく。命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。23 命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切だ。24 鳥のことを考えてみなさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。だが、神は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりもどれほど価値があることか。25 あなたがたのうちのだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。26 こんなごく小さな事さえできないのに、なぜ、ほかの事まで思ひ悩むのか。27 野原の花がどのように育つかを考えてみなさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。28 今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。

信仰の薄い者たちよ。29 あなたがたも、何を食べようか、何を飲もうかと考えてはならない。また、思ひ悩むな。30 それはみな、世の異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存じである。31 ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる。32 小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。

33 自分の持ち物を売り払って施しなさい。擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みなさい。そこは、盗人も近寄らず、虫も食い荒らさない。34 あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ。」

1 神の見方・人の見方

牧師として教会に奉仕し始めて、「天地万物を造られた神の見方と私達人間の見方は随分と違う、父なる神が尊ばれるもの・喜ばれるものを、私達人間が尊び喜ぶとは限らないし、神が忌み嫌われるものを私達人間は大切にする」と思われます。私たち人間は、目に見える表面的なところで物事を判断しがちですが、天の御神はそうではない、その奥にある本質的な部分で判断されるのでしょう。神さまが、この世界をご覧になる眼差しと私達の視線は、随分と違うようです。

そのどちらが正しいか、本当に人を幸せにし人を生かすかという、神の眼差しでありましょう。天の御神は創造者、私達人間は、被造物に過ぎないので、ですから、私達人間は、自分達にとって何が本当に大切なのか、必要なのか、見抜けていないこと、分かっていない事が多いのだと思います。

しかし、主イエスさまの御言葉は、私達にとって本当に必要なもの、大切なもののへと私達の目を開いてくださいます。

2 食べ物よりも命、衣服よりも体

「命は食べものよりも大切である、体は衣服よりも大切である。」という23節の言葉は、そのような主イエスの言葉の一つです。主イエスの言葉を聞く時、主がどのようなお方であるかを忘れることはできません。主イエスは、語る相手をしっかり見て、その人その人に応じて必要な事を語りかけるお方。いもしない「総ての人」に向かって漠然とした法則や観念を語る方ではありません。この言葉もそうでした。主は、必要なものが食べられない飢えた人達に向かってこの言葉を語ってはいないのです。主は飢えている人々に「命は食べ物よりも大切である」と仰り、平然とされているような冷たいお方ではありません。二匹の小魚と五つのパンでご自身のもとに集まってきた五千人の群衆を満腹にさせたエピソードからもそれは分かります。主イエスが飢え渴いた人々と出会ったら、先ず食物をお与えになり水を飲ませたでしょう。

今日のテキストの言葉は、飢えた人々ではなく、主の弟子達に話しておられる言葉です。弟子たちは決して豊かではありません。すべてを捨てて主に従った者たちですから。しかし、貧しいながらも、食べる食物と身に着ける衣服は与えられていたでしょう。ですが、そんな彼らの心の中には、「これから先どうなるんだろうか？」と将来を心配する人もいたのだと思います。そのような弟子達に、「心配しなくても天の父がいらっしゃる。神さまに自身を委ねて平安の内に行きなさい」と教えておられます。

そして、この言葉は、現代世界に生きる私達にはより重要な言葉だと言えます。現代の資本主義社会では、消費することが前提の社会だから。社会の多方面の力から、私達は常に消費する事、より多く所有する事へと駆り立てられており、持っていない事への不安を煽られています。そうして、生きていくのに必要以上のものを得る為に、神さまからいただいた自身の心や体を消耗してしまい、本当に大切なものを疎かにしてしまっているのではないのでしょうか。そんな現代に生きる私達一人一人に、主イエスは語りかけられます。「命や体は、あなたがたが手に入れようとあくせくし消耗している多くのものよりも、何倍も何倍も大切なものではないか」と。

3 主イエスの言葉集

さて、今日の聖書の御言葉はとても有名です。教会に来続けていれば一度は聴く言葉と言ってもよいでしょう。ルカ福音書よりはマタイ福音書6章の山上の説教の中の言葉と記憶している方も多いと思います。私達が読んでいる新共同訳聖書の福音書には、よく似た話を記している他の福音書の聖書箇所

所が記されています。新約聖書の132ページをご覧ください。今日の段落の所には、マタイ福音書6章と記されていますね。マタイ福音書6章を読んでもれば分かるのですが、今日の聖書テキストの大半は、マタイとルカに共通する主イエスの言葉です。しかし、ルカが独自に加えた主の御言葉があります。ルカ教会にだけ伝わっていた主の言葉なのか、それともルカはパウロと共にほうほうに伝道旅行に行っていたと言われているので、旅行で立ち寄った教会で聞いた主の言葉なのかもしれません。兎も角、ルカはどうしてもこの言葉を書き残したかったのだと思います。ですから、この言葉を新約聖書の中でも特に重要な教え31節「ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる。」の直後に持ってきました。ルカがとても大切にしようとして伝えたいと考えた言葉、それが32節「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。」です。

4 小さな群れよ

主イエスは「小さな群れよ」と呼びかけます。聖書の神は小さい者達、弱い者達をととても大切にされる神です。古代世界でイスラエルの民は、いつも諸外国に圧迫され、いつ滅んでもおかしくない弱小の民でした。天地万物を造った力と栄光に溢れる神にふさわしいような有力で豊かな民族は、他にいました。エジプト帝国しかり、アッシリア帝国、バビロニア帝国などなど。しかし、神は、そのような強い民族ではなく、今にも滅びそうな弱小の民、栄光の神に最もふさわしくないように人間には思える民族を選びました。神は私達人間とは全く異なる見方をされるお方です。そして、天の御神自らご自身を示し、イスラエルの民と契約を結び、彼らをご自身の「宝の民」とさえ呼び、深く愛して導いてこられました。小さい者、弱い者がご自身に自らを委ね、神の導きももと、ご自身の民として安心して生きていく事を心から望み、喜んでくださる…それが聖書の神なのです。旧約聖書を読んでもいけばすぐに分かる事ですが、2000年前の古代の書物とは思えないほど、弱く小さい人々への配慮で満ちています。旧約聖書だけではなく。新約聖書もそうです。

5 小さくされた者イエス・キリスト

何より主イエス・キリストこそ、最も小さくされた者だからです。神の御子が人となってくださった、それが主イエスです。ですから主ご自身が、父なる神によって、人の目には、最も小さくされたお方です。人の目には、最も貧しくされたお方です。人の目には、最も弱くされたお方です。ですが、大切なのは、神なくして小さく貧しく弱くされたのではなく、神としっかりと結びついて、小さく貧しく弱くされたお方です。いや、神とこれ以上ない位しっかりと結びついているか

からこそ、表面的には小さく貧しく弱くなることがおできになったのでしょう。イエス様は、神と共にあって小さく貧しく弱いのです。

このイエス・キリストを神はこよなく喜ばれます。それは、32節の言葉からも分かります。32節の「喜んで」は、主イエス受洗の際、天が開け聖霊が下って聞こえた声「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に叶うもの」の「心に叶う」という語と同じ単語です。そう、最も神の御心に叶う者、神が最も喜ばれる者は、イエス・キリストです。この方は真の神にして真の人…と教会では言われています。真の人ですから、私達の表面的な部分だけでなく、その奥にある罪の現実もよくご存じです。そして、真の神ですから、父なる神の義なる愛、愛なる義もよくよく知っておられます。

6 小さくされた者への恵み

その主イエスの言葉には、神と共にあって小さくされた者の喜びに満ちています。今日の聖書テキストを彩る鳥や野の花に関する譬えも、主イエスご自身の生活経験から出てきた言葉に違いありません。主イエスは聖霊によってマリアに宿り、大工ヨセフの家に人の子として産まれたと伝えられています。しかし、ヨセフは棟梁と呼ばれるような裕福な大工ではなく、貧しい大工であったと言われています。しかも、ヨセフは早く亡くなったようです。幼い弟妹たちを養う為に、イエス様は母マリアと協力して必死に働いたでしょう。食べる物や着る物に困る…という窮地にも立たされた事もあったのだと想像されます。生活の為に仕事に追われる合間、イエス様は目をあげて、空を飛ぶ鳥を見た、「ああ、聖書では汚れた鳥と言われ人には嫌われている鳥でさえ、何も働かない鳥でさえ、天の父は養って下さるんだ」と父なる神の慈しみの細やかさに想いを寄せたのでしょう。

また、夕方、火を起こす為に枯れた野草を炉に投げ入れている時、昨日までは、ソロモン王の豪華絢爛な装束も遠く及ばぬほどに太陽の光を受けて豪華に光輝き咲き誇っていた花の姿が浮かんできた。「こんな儂い野の花さえ父はソロモンに負けないくらい装ってくださる」と父なる神の愛の深さを思ったのでしょう。そうして、父なる神に「天の父よ、私達の日ごとの糧を、生きていくのに必要なものをどうかお与えください」と祈り願ったのでしょう。そして実際に神に助けられ、日毎の糧を得ることができた経験をしてきたのだと思います。

鳥と野の花の譬えは、小さくされた者の目線で、神の御手の業を見上げた時の優しく穏やかで平安に満ちた神の世界を語った言葉です。神により頼もうとする時、鳥や花でさえ教師になるのです。鳥や花からも学ぶ、それは神が共にいて低くされた者、小さくされた者だけが受け取られる大きな恵みです。

しかし、小さくされた者、低くされた者には、「生きるのに必要不可欠の最低限のものしか与えられない」なんていうギスギスした話しではありません。神の貧しさは人間の豊かさに勝るからです。この野の花の譬えから、それがよく

分かります。野に咲く花は、たった一日しか咲いていないのに、栄華を極めたソロモン王以上の豪華絢爛な装束より美しく、神は装わせてくださるのです。父なる神は、神の御前に小さくなる者達、弱くなる者達をこそ、人間では造り出す事の出来ない美しさで装わせてくださるのです。神の装いは、お金では買えないものであり、それ以上のものではありません。

7 キリストが共にいる

小さくされた神の御子、人となりたる神の御子イエス・キリストは仰います。「はっきり言うておく。わたしのきょうだいであるこの最も小さいものの一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」(マタイ 25:40)。「人間社会で小さくされた者達、弱くされた者達に、あなた方がしてくれた愛の業こそ、この私にしてくれたのと同じだ」ということです。人間社会で小さくされた者、弱くされた者の傍らに、主イエスが確かに共にいてくださることが分かります。人間社会で小さくされた者、弱くされた者、貧しくされた者こそ、イエスさまにより近い者だと言えます。

私は、小さい者、弱い者が罪を犯さない…と言っているわけではありません。人間ですから当然罪を犯します。人は貧しく小さければ貧しく小さいなりの罪を犯すし、豊かであれば豊かなりの罪を犯します。神から見ればみな、罪人です。しかし、キリストは人間社会では評価されず相手にされず疎外されている人々、小さく弱く貧しくされている人々を深く深く憐み、共にあって、御許に招いておられます。

それは小さい人々、弱い人々だけの為ではありません。小さく弱い人々と共にいる事によって、「自分の力で生きている」と思っている人々にも、神の義なる愛、愛なる義を示そうとしておられる、そして、「神の御許に立ち帰り、へりくだり、神の御前に小さくされた者として神の恵みの内に生かされる喜びを知りなさい」と招いておられるのです。29節で主イエスは、「**思い悩むな。**」と仰いますが、この＜思い悩む＞というギリシャ語には、「思い上がる」という意味があります。主イエスは、「思い悩むな」という言葉の奥で、「思い上がるな、私の御前に小さい者となり、そのみ恵みを受け取りなさい」と招いておられるのです。聖書の神は、主イエスは、御前に小さくなる者、弱い者を心から愛し、思い上がる者を打ち砕くお方です。

8 M. F兄の生涯

「主イエスは小さくされた者、弱くされた者のすぐ傍らにいらっしゃる。」—2／6に召天されたM. F兄を見ていてそのように思われました。M. F兄は30代で難病を発病し、後半生は、病との闘いでした。それはきれいごとでは済まされない厳しい現実。しかし、M. F兄は2017年に脳梗塞で倒れるまで毎週

教会の礼拝に通い神により頼みながら、地上の命を最後まで走りぬきました。病院に最後に尋ねたのは、2/1(土)でした。元気な頃には山登りが趣味で自然が大好きだったと直子姉妹に聞き、季節の花をもっていき、枕元に飾りました。兄弟はその花をじっと見ておられました。その横顔を思い出しつつ今日のテキストを読むと、M. F兄は、食べものではなく命の健やかさを求め、衣服ではなく体の健やかなる事を、造り主なる神に最後まで求めておられたのだと思わされています。人の目にはM. F兄は病んでいたかもしれない、しかし、神の目にはM. F兄は決して病んではいなかった、そう確信します。M. F兄の傍らには、確かに主イエスがおられ、兄を支え続けてくださっていたから。そして、

「小さな者よ、恐れるな。あなたの父は喜んで神の国をくださる」という主イエスの言葉に励まされつつ、M. F兄は、神の国を求めて、この地上を生き抜いたのであらうと思います。

9 教会への言葉

この「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。」という言葉は、何よりも教会への主イエスの言葉です。ルカはこの主イエスの弟子達への言葉を、自身の教会への言葉としてここに記したのでしょう。ルカの時代、ユダヤ人やローマ帝国から迫害され小さくされた教会でした。この世の力を心配し不安に囚われている教会は、主イエスのこの言葉にどれほど慰めと励ましを得た事でしょうか。代々の教会が心に刻み、繰り返して来た言葉、長く続いた迫害の時代、教会を支えた主の言葉です。

教会を支えたのは迫害の時代だけではありません。迫害もなく教会がこの世的な権力をもった豊かな時代、教会もまたこの世的な富や権力、地位を求めてしまった事がありました。神がよしとする事ではなくて、人間から見るとよいものを求めてしまう、それは、信仰共同体にも言えることです。大きい事はいいこと、豊かな事はいいこと、世間が認めてくれるのはいいこと。そんな人間の思いに絡み取られ、教会は、何度となく神から見たら大切なもの、重要なものを見失いそうになったし、実際に見失った事も多々ありました。そんな教会を、この言葉は、主の御前に引き戻しました。富や地位や力を求めるのではなく、イエス・キリストに倣い神の国を求める小さな群れこそ、神が最も喜ばれる者だと気づかされたのです。

10 神の養い

私達が神の国を追い求め、キリスト・イエスの後に従って生きる時、この世の富や地位や栄を追い求める事からくる多くの思い煩いや心配ごとから解放され、自由にされます。神が大切にするものを大切に自由、神が喜ばれ

るものを喜こんで生きる自由が与えられるのです。半分、天国の人間になるという事でしょう。しかし、半分はこの地上で生きています。この世の価値観とは違う天国の価値観でこの地上を肉の体をまとして生きる事になるので、苦労や戦いがあります。自分の中での葛藤もあります。しかし、神はご自身の群れを、ご自身の民、小さな群れを見捨てる事はしません。地上の試練の中にあつて、神を呼び求め続ければ、必ず神はみ言葉を与え、私達の目を開かせてくださるし、具体的な助けも与えてくださいます。想いもよらぬ方法で助けてくださいます。

11 最後に

火曜日、11日には、この礼拝堂からM. F兄を天国に送り出します。病と闘いつつも神を見上げて生きたM. F兄、小さくされたイエス・キリストと共に生きた兄の生涯を通してイエス・キリストの父なる神を礼拝し、小さい群れから、天へと兄を送り出したいと切に願います。そして、M. F兄がそうであったように、私達もまた小さな群れの一員として、甦りの朝の光の中に、この地上の七日間を歩み、再びこの御堂で神を礼拝したい、そのように切に願います。